

「 平和の尊さと戦争の悲惨さ 平和憲法を守り続けるために 」

神戸市 匿名希望

8月6日、平和の祭典オリンピックが中国で開幕した。その同じ日の6日、ロシアが南オセチアに軍事介入。戦争状態になった。ロシア軍はグルジアを爆撃。プーチン首相は事実上の「戦争」が始ったとし、報復すると言明した。世界中の人々が、オリンピックの開幕を喜び、テレビ中継を楽しみ、自国選手のメダル獲得を期待し、夢を膨らませていた時なのに。夕焼けのように鮮やかなオリンピックの色一色に染まった世界の空。この世界の空は灰色になり暗雲が広がっている。とてもいやな兆候だ。世界のあちこちで、今なお、戦争が起っている。戦争は、すべてを奪い、破壊し、大きな傷跡を残し、人間を不幸のどん底に突き落とす。愚かなこと、それが戦争。戦争は犯罪だ。日本は、63年前の8月6日に広島に、8月9日には、長崎に原爆を投下された。世界で唯一の原爆の被爆国である。だからこそ、今も、これから先も、ずっと、日本人の私達ひとり一人が、平和の尊さ、戦争の悲惨さ、命の大切さを考えなければならない。8月10日(日曜日)朝のテレビ番組「ライフ・ライン」の中で、被爆者であり、腹話術師の宇根岡みさおさん(83才)が自らの被爆体験を語っていた。広島に原爆を投下された時は、20才の時、校舎の窓ガラスの破片が爆風と共に飛んできて、御自身の目に入り、片目を失明し、最愛の母親までも亡くした。宇根岡さんは兄と一緒に母親を火葬しなければいけなかったのが、兄弟が2人で焼いた。母親の遺骨を拾うとバケツ一杯になった。あまりにも悲しい被爆体験のお話だった。「この被爆体験を、死んだ人達の代わりに、私の口で90才になるまで語り続けたい。」と、言っておられた。素晴らしい目標だと思う。その体験談を聞いた時、私の母から聞かされていた母にとって実弟を失ったという辛い戦争体験を思い出した。私は、やるせなく暗い心になった。母の弟は17才の時、召集令状が届き、海軍兵として出征した。そして米軍に爆撃され戦死した。若く尊い命が無残にも海の中に散らされてしまった。本当に、国の為に喜んで死んでいったのだろうか？「天皇陛下、バンザイ。」と叫んで息絶えたのだろうか？私には、いくつかの疑問が残っている。母から、戦死した私の叔父の事について色々聞かされていた。今でも、白い軍服姿の凛々しい若き日の叔父の写真が目には浮かぶ。1枚の写真の中の叔父の姿。私の叔父は、母にとって、とても優しく、姉思いの良い弟だったと、いつも母から聞かされていた。私は、その優しい叔父に一度も会った事がない。会えなかった。なぜなら、私が生まれる数年前に、叔父が戦死したから。私は戦後生まれである。だから、母から語り伝えてもらった戦争の話や、映画やテレビの映像や写真からしか戦争の悲惨さを知ることが出来ない。今、私は、たった一度でいいから叔父に会いたかったと思っている。もし、今、生きていれば、80才の優しいおじいさんになっていた筈なのに……。もし、叔父が生きていたとしたら、私は叔父に、心から「ありがとう。」と言いたい。

私の最愛の母のことを大切にして、精一杯のことをしてくれたから。そして、私は叔父と、『平和』について語り合いたい。叔父は、きっと、優しく、ほほえみながら、叔父の心の中にある優しさと、平和の心をにじみ出しながら、「本当に大切なものは平和なんだ。自分の子供や孫達に、平和の尊さ、大切さを教え語り続けることが大人の責任だよ。」と言うに違いないと私は信じている。平和憲法をこれからもずっと守り続けなくてはいけない。二度と戦争を繰り返さない為に。第9条 戦争放棄を改正すべきではないと思う。あなたと私、皆の輝ける未来のために。私達は、平和の尊さと命の大切さ、戦争の悲惨さを次世代に伝えてゆくことが、なすべき最大の責務である。